

I 令和4年度の運営総括及び来期の課題

2020年から始まった災害『新型コロナウイルス』の猛威は今年も収まらず、ウイルスありきの児童館運営となった1年だった。withコロナ初年度は、まるで未知のウイルスに対し、対策がわからずただただ戸惑ったが、徐々にウイルスに対する対処が定まり、感染対策に気をつけつつ、昨年度より多くのイベントを行ってきた。その時々状況に応じながら、臨機応変にイベントの中止や縮小なども行った。また今年度はついに休館措置をとることもなく1年間運営することができ、利用者のニーズにも応えることができたのではないかと考えている。

今後何年コロナウイルスと共存していかねばならないのかはわからないが、昨年、“withコロナ”として、生活の中に常にウイルスがあることを前提とした上で運営をしていくように考え方自体を変えていかなければならないと感じ、やらない、できないばかりではなく、“じゃあどう変えたらできるか？”という風を考え、逆境に負けない、しなやかな地域の居場所づくりを課題に掲げた。それを踏まえ、今年度はコロナ渦の中でもさらに新たなことに挑戦していくことができたと自負している。今後もこのように前向きにやれることを考え、感染症対策をしっかりとし、利用者が安心安全に利用できる児童館運営をしていきたい。

1. 乳幼児事業

(1) 総括

夏頃まで利用が少なかったが、秋口にかけてどんどん利用が増えていった。定例の『ちびっこ広場』の参加人数が特に増え、コロナ前参加が多かった年と同じくらいの十数組にのぼるほどだった。コロナ渦も3年目ということで利用者も状況に慣れ、その時々感染の様子をみながら児童館利用をし、たくましく育児をする母親達の姿を見た。それと同時に、やはりコロナ禍で様々なイベントや情報入手・交流の場が減っていることで、より強く情報や繋がりを求めていることの結果が、『ちびっこ広場』参加者増なのだなとも感じた。

児童館を通じて誰かと話したり笑い合ったり、悩みを共有することで保護者の心が軽くなり、また子ども達も家でお母さんとだけでのコミュニケーションだけではなく、同年代の子ども達と関わり合うことでより豊かな発達に繋がっていく。まさに支援センターや児童館だからこそできることで、地域の子育て支援に貢献できたと感じている。

①ちびっこ広場

毎週水曜日の午前中に『ちびっこ広場』を行っている。内容は絵本読み聞かせ、手遊び、親子体操、工作、誕生会等となっている。『ちびっこ広場』への参加を目的に来館する親子が多く、親子で一緒に手遊びやふれあい遊びをしたりする楽しさを共有している。

今年度は先述の通り、コロナ禍の割にはとても利用人数の多い年だった。月齢の高い2, 3歳児も多かったが、今年度1歳になる子を連れた親子の利用も非常に多く、幅広い月齢児の利用だった。そのため、同年齢児同士、異年齢児同士の交流どちらもでき、母親同士の情報交換にも事欠かなかったように感じる。

祖父母が孫を連れて来館することも多く、祖母同士、祖母と母親などの異世代の交流も度々見られる。こうして“地域一体となって子育てをする”という環境ができ上がってきている。今後も利用者のニーズをしっかりと捉え、より楽しい、居心地の良い児童館を目指して管理運営を行っていききたい。

②つくって遊ぼう

毎月第2週目の水曜日に親子で一緒に工作を楽しむ行事として『つくって遊ぼう』を行った。季節に合わせた工作や、月齢の低いお子さんでも遊べる手作りおもちゃなど、親子で楽しんで工作できるように工夫をしてきた。この行事をきっかけに、工作が好きになっていく子どももいるようで、『ちびっこ広場』に参加していた幼児が成長し、児童館の工作コーナーで廃材を使い楽しそうに工作をしている姿もよく見られる。

③しゃべろっと

南区健康福祉課主催の子育て支援研修会に参加し子育て支援リーダーとなった『子育てオーエンジャー☆みなみ』が中心となり、乳幼児の母親対象に様々なイベントを企画し、支援を行っている。味方児童館を活動場所とし、育児中のちょっとしたストレスや愚痴を気軽に話したり育児の悩みを相談し合うのが目的だ。これまでは話しやすい環境づくりをするためにハンドトリートメントやお茶、お菓子も用意し、予約なしで気軽に遊びに来られるような内容だったが、2020年度からは飲食やハンドトリートメントは中止、コロナ禍でも利用者が安心・安全に参加できるものに内容を変えて行った。年間6回の企画だが、今年度は一度も中止することなく予定通り行うことができ良かった。

9月には、ここ数年コロナの為中止せざるをえなくなっていた『ママヨガ』を予定通り開催。人数を制限し対策を行いつつ、参加者に楽しんでもらうことができた。

11月には『親子で人形劇を楽しもう』とし、劇団『赤ずきん』の方々をお招きして人形劇を開催。演目は、『スイミー』や『おはながわらった』、『ぬけたよおいも』など、誰しものが子どもの頃に親しんだことのある童謡や絵本を題材にした内容ばかりだったので、母親達も食い入るように観ていた。BGMなども工夫を凝らしてくださり、引き込まれるような演目で利用者アンケートも非常に好評だった。

まだまだ味方児童館の存在自体を知らない方や、知っていてもなかなか一歩踏み出すことができない母親も多い。地域の方と協力しながら、そうした母親達を孤立させないためのケアを今後も続けていきたい。

④BP講座

2～5か月の第1子とその母親を対象とした、初めての育児の学び、親子の絆づくり、仲間づくりを目的とした全4回コースのBP講座は、今年度は人数を制限して行った。コロナ禍で様々な子育て支援のイベントや育児相談、健診などが中止になり、不安な思いを抱えた新米ママが多く参加した。子どもの発育についての勉強会をしたり、同じ月齢の子どもを抱える母親として悩みや思いを共有し合い、仲間として絆を深めた。

(2) 来期の課題

味方児童館は、土日に父親が幼児を連れて来館することが多いため、来年度は外部講師をお招きして父親向けの講座や、父親と子どもの父子向けイベントを行っていききたい。共働きが当たり前の時代でもあり、あえて父親を対象を絞ることで、なかなか児童館に行きづらいつ感じている方にも関心を持って来館してもらえるきっかけになるのではないかとも思う。母親とはまた違う、父親ならではの子育ての不安や困りごとにも寄り添っていきたいと考えている。

2. 小学生事業

(1) 総括

今年度も昨年に引き続きコロナウイルスの影響で小学生の来館が少なかったが、昨年度に比べると利用が多く感じられた。今年度は特に、新1年生と6年生の来館が多かった。利用数が伸びた原因として考えられるのは、味方児童館で人気のスポーツ“三步ドッジボール”の解禁だと考えられる。感染状況に応じて自粛する期間もあったが、対策を講じ、継続的に遊べるようにしたことでそれを目当てに利用が戻ってきた高学年男子等も多かった。また、小学校入学時にコロナ禍だったため、中学年などは初めて三步ドッジボールに触れる子も多く、その楽しさのとりこになる子もいた。小学生の母親からは、「コロナ禍で友達の家に行きゲームをする毎日だったが、最近飽きてきて、ふと児童館に行きドッジボールで体を動かしたことで子ども達がドッジボールにはまった様子。そこから皆で児童館で待ち合わせをして遊ぶようになった。コロナ禍で思い切り身体を動かす場がほぼないので、こういう場を提供してもらって本当に有難い」といった嬉しい声も聞かれた。

また、相変わらず味方児童館の特長ともいえる異年齢・異学校の子ども達同士の交流は盛んだ。年上の子ども達が年下の子ども達を受入れ、一緒に遊ぶ姿が日常的に見られていた。遊びが制限される中でも、児童館が楽しいと思ってもらえるようなことを考えていくことが大切なので、今後も子ども達の自由な発想や気持ちを大切に、寄り添いながら、子ども達と一緒に楽しい児童館をつくりあげていきたい。

① 定例行事『なかよし広場』

『なかよし広場』は、毎月1回、その日に遊びに来ていた小学生が、30分間職員が企画したレクリエーションをして遊ぶというイベントだ。職員が企画したレクリエーションを行うので、子ども達が自分では思いつかないような遊びができ、遊びが広がるというメリットもある。内容の中には、子ども達の防災に関する知識と意識を高めるために『ミニ

避難訓練』を定期的に組み込んだ。今年度は回数を減らした分、内容に工夫を凝らした。『文字レース』や、『お正月遊び』として『お手玉落とし』や『風船羽子板レース』、『スーパー坊主めぐり』など、複数のゲームを組み合わせた内容で行った。また、指定管理プレゼンの際、来期事業に掲げた『ハザードマップ作り』も『なかよし広場』の中で行うことができ、学校でまだそういった経験のない低学年の防災に関する知識、関心を高めることができた。『なかよし広場』は、異学年の子ども達同士で交流できるので、ここが児童館の良い部分だと実感させられる。

② 移動児童館

今年の『移動児童館』も例年通り『味方ひまわりクラブ』で二度行った。内容もコロナ禍でできる内容を考え、一度目は、子ども達が座っていてもその場でできるレクリエーションの提供と大型絵本の読み聞かせ、児童館で行うイベント『ぬりえコンテスト』へのひまわりクラブの子ども達の参加を内容とした。

二度目は大型紙芝居の読み聞かせと〇×クイズ、壁面工作材料の提供ということで、今年の干支うさぎの絵馬のキットを作成し届けた。コロナ禍では、かなりできることが制限された移動児童館となってしまうが、とても喜んでもらったので、次年度もできる形での移動児童館を実施していきたいと思う。

③ その他の行事

コロナウイルスの影響で中止にした行事もあったが、やり方を変えたり、規模を縮小して行った行事も多い。例えば、昨年度からやり方をどんどん変えている『ハロウィンパーティー』は、『ハロウィン5days』とし、日数を長く設け、『ハロウィンコロコロボール』というゲームに期間中挑戦でき、ちょっとしたおみやげのお菓子がもらえるというコロナ渦ならではの催しになった。それと同様に、おまつりができない代わりに夏休みに“5days”シリーズを2回実施。おまつりで行うブースの内容を5日間にわたって行い、景品もおまつりであげるものを子ども達にプレゼント。少しでもおまつりの気分を味わってもらえるようにした。日にちを分散することで感染のリスクも下がり、このやり方はコロナ渦でも継続していけるのでとても良いアイデアだと感じている。また、1、2月には新たに『南区子どもの遊び場スタンプラリー』として、南区4館ある児童館、白根健康福祉センターと合同で、利用促進に繋がるようなイベントを実施。小学生だけでなく、乳幼児親子も対象とし、いつも利用している児童館だけでなく、様々な児童館を見てもらう、利用してもらおうきっかけを作った。ワーカーズコープが南区全館の児童館を運営しているからこそその強み、連携を大いに発揮できた。

(2) 来期の課題

昨年同様、“with コロナ”の中で子ども達が安全安心に遊べる企画を考えていく。その時々状況に応じ、柔軟にやり方を変え、時代に沿った児童館運営で子ども達を楽しませたい。進み続けたい。

3. 中・高生事業

(1) 総括

今年はコロナ渦ではあったが中学校と連携を取り、指定管理プレゼン時に来期事業として掲げていた新事業を行うことができた。また、中学生の来館数が跳ね上がり、開館以来で一番中学生の来館が多い年だった。その背景には、やはり子ども達も状況に慣れ、徐々にコロナ渦での居場所を求め始めたこと、小学生同様、体を思いきり動かせるストレス発散の場として児童館を利用し始めたことなどが考えられる。小学生と一緒に三步ドッジボールをしたり、おしゃべりを楽しんだりしながら過ごし、小学生にとって“中学生になったらこういう利用ができる”といった身近なロールモデルにもなってくれている。

また、中学生だけでなくさらに上の世代の大学生、社会人となった子ども達が近況報告がてら児童館のボランティアに来てくれることが増えた。度々来館し、小学生の遊び相手や話し相手をしてくれることで、小学生達も憧れを抱いたり、さらに自分達よりも下の年齢の子ども達に優しく接してあげたり面倒を見てあげたりすることができてきている。児童館を利用した子ども達が成長し、自分達がしてもらったように今度は下の世代に返していく、こうした循環が双方に良い刺激と成長を与えていると思う。この流れを大切に、幅広い世代同士が交流できるよう手助けしながら見守っていきたい。

① クリスマス会

今年もクリスマス会で味方中学校吹奏楽部の生徒達がクリスマス演奏会を行ってくれた。昨年同様、鑑賞する対象を小学生30名限定とし実現できた。発表の場がなかなかなかった中学生達にとっても地元子ども達に還元できる良い機会となったようだった。今年もアンコール曲で曲に合わせた衣装チェンジをしてくれたり、演奏中に振りをつけてくれたり、ここでも、自分達より下の世代を楽しませようとする中学生達の思いと成長が感じられ、とても嬉しく感じた。

② 児童館御OBOGによる中学生のための座談会

新規事業として、9月に『児童館OBOGによる中学生のための座談会』を行った。これは、指定管理プレゼンの際に今後行いたい事業として挙げていたもので、味方地域の子ども達のように小さな規模のコミュニティから大きなコミュニティに加わる際に陥ってしまう可能性のある“高1ギャップ”というものを少しでも解消する手助けになるよう、実際に高1ギャップを経験した味方の先輩の話を聞く、という企画。中学校側に相談したところ、すぐに快諾してもらえ、早速の実施となった。授業時間を1時間もらい、高校進学を間近に控えた中学3年生を対象に行った。先輩には、現在も児童館にボランティアに来てくれている現役大学生を迎え、当時の状況や起こった出来事、自身の思いなどを赤裸々に語ってもらい、パワーポイントを使って中学生に講義を行った。その後、少人数毎のグループに分かれ、高校進学にあたり楽しみなこと、不安なこと等を話し合い、さらに自分達なりにその不安なことの解決策を考えてもらった。大学生の先輩からは、その日一日を乗り切れるような、自分の気持ちをあげてくれる“やる気のたね”を考えてみるようアドバイスがあり、それを一人一人が考え授業終了とした。授業後にとったアンケートでは、「先輩の話が聞けて、不安が少し解消された」「友達も自分と同じことを不安に思ってたことがわ

かり安心した」「もし高校で高1ギャップになったら、今日のことを思い出して頑張ろうと思う」などの前向きな意見がうかがえ、企画した側として嬉しかった。まだこの試みが中学生にどのような影響を及ぼすかはわからないが、高校進学し、何かに躓いたときにこの時の話を思い出し、力を抜いて自身の道を歩いて行ってほしい。今後もこのような機会をつくっていききたいと思う。

(2) 来期の課題

中高生においても、やはりコロナ禍でも実現可能な、中高生がもっと児童館で活躍できたり、主役になれるような事業を考えていきたい。コロナ前に行っていた中学生のおまつりボランティアの再開など中学生が児童館を通して地域で活躍できるような場づくりをしていきたい。

4. 地域との連携事業

①味方地区公民館との連携事業

- ・育児講座ベビーマッサージ（6月）…実施
- ・陶芸教室（7、8月）…実施
- ・クリスマスオーナメントづくり（12月）…実施
- ・親子リトミック（3月）…実施

②味方小学校、おむすびクラブとの連携事業

- ・いきいき子ども塾「小学校に泊まろう」…中止
- ・「自学おうえん隊」…実施
- ・文化祭体験教室「カプラ」…中止

③味方中学校との連携事業

- ・職場体験（7月）…中止
- ・児童館OBOGによる中学生のための座談会（9月）…実施
- ・クリスマス会吹奏楽部演奏会（12月）…実施
- ・おまつり生徒ボランティア（8、2月）…中止

④ボランティアとの連携事業

- ・ちびっこクリスマス会
- ・クリスマス会
- ・ちびっこ広場での絵本の読み聞かせ
- ・瓢箪栽培ボランティア